

ガリバー旅行記 ジョナサン・スイフト

訳 原 民喜

第一、小人国（リリパット）

1 大騒動

私はいろいろ不思議な国を旅行して、さまざまの珍しいことを見てきた者です。名前はレミュエル・ガリバーと申します。

子供のときから、船に乗って外国へ行ってみたいと思っていたので、航海術や、数学や、医学などを勉強しました。外国語の勉強も、私は大へん得意でした。

一六九九年の五月、私は『かもしか号』に乗って、イギリスの港から出帆しゅっぽんしました。船が東インドに向う頃から、海が荒れだし、船員たちは大そ

う弱っていました。

十一月五日のことです。ひどい霧の中を、船は進んでいました。その霧のために、大きな岩が、すぐ目の前に現れてくるまで、気がつかなかったのです。

あッという間に、岩に衝突、船は真二つになりました。それでも、六人だけはボートに乗り移ることができました。私たちは、くたくたに疲れていたので、ボートを漕ぐ力もなくなり、ただ海上をただよっていました。と急に吹いて来た北風が、いきなり、ボートをひっくりかえしてしまいました。で、それきり、仲間の運命はどうなったのか、わかりませんでした。

ただ、私はひとり夢中で、泳ぎつづけました。何度も何度も、試しに足を下げてみましたが、とても海底にはとどきません。嵐はようやく静まってきましたが、私はもう泳ぐ力もなくなっています。

した。そして私の足は、今ひとりでに海底にとどきました。

ふと気がつくと、背が立つのです。このときほど、うれしかったことはありません。そこから一マイルばかり歩いて、私は岸にたどりつくことができました。

私が陸おかに上ったのは、かれこれ夜の八時頃でした。あたりには、家も人も見あたりません。いや、

とにかく、ひどく疲れていたので、私は睡ねむいばかりでした。草の上に横になったかとおもうと、たちまち、何もかもわからなくなりました。ほんとに、このときほどよく眠ったことは、生れてから今まで、一度もなかったことです。

ほっと目がさめると、もう夜明けらしく、空が明るんでいました。さて起きようかな、と思い、身動きしようとする、どうしたことか、身体がさっぱり動きません。気がつくと、私の身体は、

手も足も、細い紐ひもで地面に、しっかりくりつけてあるのです。髪の毛までくりつけてあります。これでは、私はただ、仰向けになっているほかはありません。

日はだんだん暑くなり、それが眼にギラギラします。まわりに、何かガヤガヤという騒ぎが聞えてきましたが、しばらくすると、私の足の上を、何か生物が、ゴソゴソ這はっているようです。その生物は、私の胸の上を通って、顎あごのところまでやって来ました。

私はそつと、下目を使ってそれを眺めると、なんと、それは人間なのです。身長六インチもない小人が、弓矢を手にして、私の顎のところところに立っているのです。そのあとにつづいて、四十人あまりの小人が、今ぞろぞろ歩いて来ます。いや、驚いたの驚かなかつたの、私はいきなり、ワツと大

声を立てたものです。

※テキストは、インターネット上の図書館「青空文庫」をもとにして加工しました。